



かごバッグの村 ——ガーナの地場産業と世界とのつながり——

牛久 晴香 著

京都 昭和堂 2020年 xvi+366+xvi p.

ガーナ北部のボルガタンガ地方で生産される手編みのかごバッグ（ボルガ・バスケット）は、おもに欧米や日本などの先進国市場で販売されている。本書は、もともとは地酒の濾し器であった編み製品がボルガ・バスケットとして輸出を主目的とする地場産業に発展していく経緯と、ボルガ・バスケットの原料調達から輸出販売までの一連の流れについて考察した学術書である。

「ガーナの辺境にある小さな農村が、どのようにして世界の市場にひろく流通するようなバスケットの産地になっていったのであろうか」（まえがき）という問いに答えるために、著者はボルガタンガのニャリガ村をベースに、10年間にわたり延べ20カ月の現地調査を実施した。そして、編み手や仲買人など、ボルガ・バスケットにかかわる人々へのインタビューや行動観察を基礎に考察を進めている。もちろん、現地で得た情報はさまざまなデータや文献資料によって検証・裏付けされるのだが、その手法が柔軟性と多様性に富んでおり、「なるほど、そうきたか！」の連続であった。たとえば、ボルガ・バスケットの原料（ギネアキビ）の採集は「生息地（ガーナ南部）の人々には他の草本との識別ができないから、ボルガタンガ出身の人が行う」というインタビュー内容の背景を探るために、イギリスのキューガーデンが発行する文献でガーナの編み製品に使われる植物を調べ、それぞれの生息地域を別の文献を駆使してマッピングする。また、編み手が語った「ボルガ・バスケットの形状によって編むのにかかる時間が異なる」ことを確認するために、著者が所有する2種類のバスケットの網目の数を数え、編む時間を推計したりする。

こうした考察からみえてきたのは、ボルガ・バスケットの特殊な生産・流通体制である。通常のサプライチェーンの場合、川下の企業の立場が相対的に強く、その意向を川上の小規模・零細事業者が受容する体制となりがちである。しかしボルガ・バスケットの場合は、上流に位置する編み手の働き方——著者の言葉で「気ままな」「無理のない」と表現される——が重んじられており、編み手と国内外の卸売企業を仲介する仲買人が双方に折り合いをつける形で両者をつなぐという重要な役割を果たしている。この編み手フレンドリーなサプライチェーンマネジメントは偶然ではなく必然の結果であることが、詳細な調査と多角的な分析によって示されていく。加えて、考察の過程はガーナの商慣行や文化を紹介する側面も併せ持っており、さまざまな角度から興味深く読める書物である。

箭内 彰子（やない・あきこ／アジア経済研究所）

